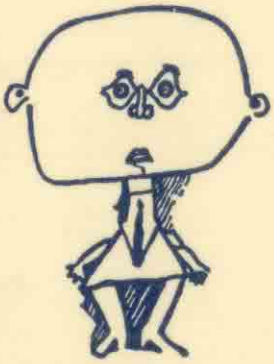
あくびノオト

北杜夫

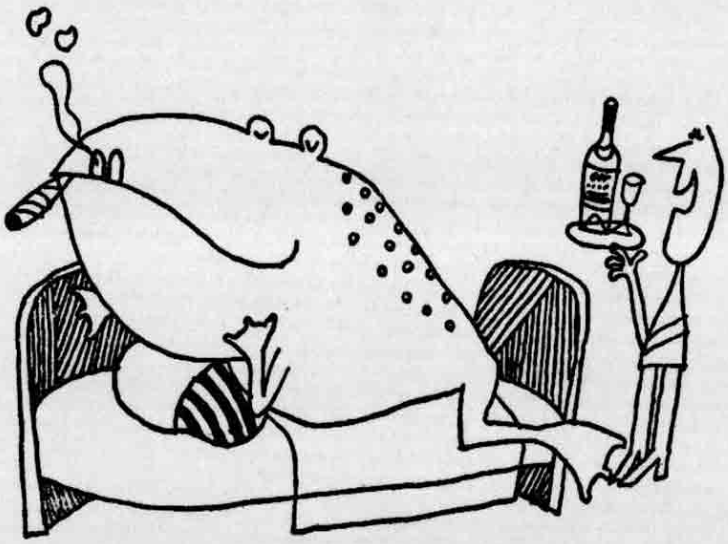
新潮社



あくびノオト

北杜夫

新潮社



あくびノオト

一九六一年八月五日 発行
一九七八年三月二五日 四〇刷

定価 六八〇円

著者 北杜夫
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話、業務(〇三)二六六-五一一一
編集(〇三)二六六-五四一一
振替東京四-八〇八番

印刷 東洋印刷株式会社
製本 新宿加藤製本

(乱丁・落丁本は小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担でお取替えします)

© 1961 Morio Kita Printed in Japan

もくじ・ページ

1

なまけもの論　八

なまけもの再論　一七

ホラ天国・八丈島　二九

女人礼讃　四二

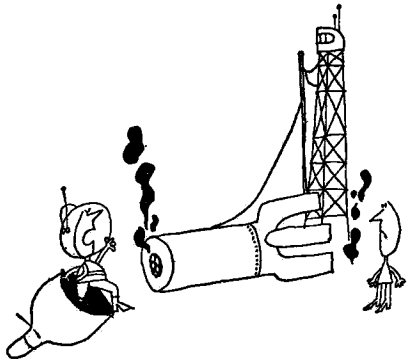
アフリカ沖のながあい航海　五一

2

第三惑星ホラ株式会社　六八

少年と狼　八四

彼は新しい日記帳を抱いて泣く　二八

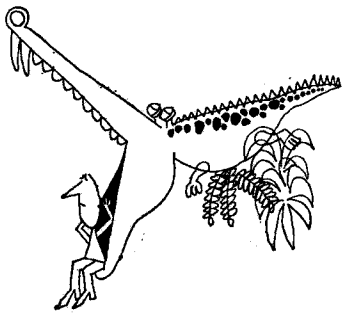


3

活動写真　一三九
人われを白痴とよぶ　一五六
当世医者心得　一六一
葡萄酒のこと　一六七
酒をやめさせる薬　一七一
ボロ車のこと　一七五
子供マンガはやはり害がある？　一七八
私の児童漫画ロン　一八一
名前のことなど　一八五

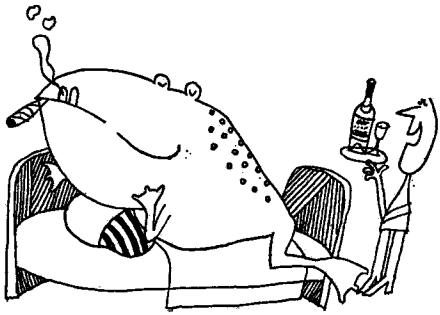
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

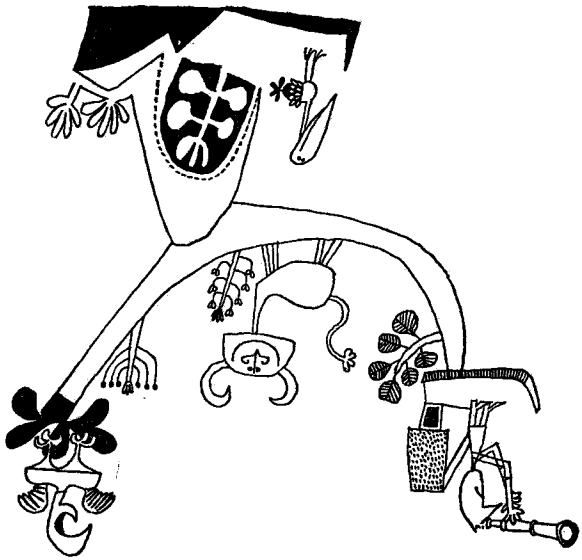
虫をくれるのは困る　一八八
一等船客失格　一九一
アフリカ・マイマイ　一九四
宮古島にて　一九七
沖縄のはずれの島　二〇〇
税関にて　二〇五
大　凧　二一〇
宇宙の加速度　二一三
朝の光　二一七



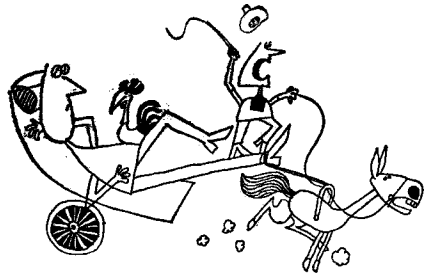
装幀挿絵　佐々木侃司（かんじ）

あくびノオト





I



なまけもの論

女は男をオウボウであるという。男はそれに対し、俺たちには仕事がある、という。仕事というのが男の逃げ言葉で、なかにはたいへん威張って女房にネクタイを結ばせ、そろえさせた靴に足を突っこみ、おもむろにカバンを受取り、ちょっと眉などしかめてみせ、「なにしろ男は門を一歩出れば、七人の敵がある」などとうそぶく。そしてふんぞりかえって門を出たとたん、バナナの皮にすべって仰向けに転倒し、おそろしい顔をしてうしろをふりかえり、「みろ、このとおりだ！」とうめき、なおさらふんぞりかえって行ってしまう。こういう男にかぎり、会社に着くと机の上に鼻毛など植えていて何にもしない。

と、ここまで読むと女性は喜ぶだろうが、現実にはなかなかこのくらいのことで片づく問題ではない。第一、バナナの皮でひっくりかえる男が現代にいるかどうか。おそらく遠い過去においてバナナの皮にすべった人間が幾人かいたのであろう。ところが数えきれぬ文章や漫画によっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て、バナナの皮の危険性はあまりに誇大に宣伝されたため、人類はバナナの皮に対して極度に鋭敏になってしまった。それゆえ、実際にバナナの皮によって横転した人間がいたときは、新聞の社会欄にトップ記事とはいかないまでも報道すべき価値が確かにあるのである。

バナナの皮はさておくとして、この男のキマリ文句である仕事なるものはどうもいかがわしい。立派な、とか、讃めたたうべき、とかいう形容詞がつく仕事になればなるほど、単純に衣食住をまかなうという生物的条件からイツダツしている。たとえば、かりに男が小屋をつくるために斧で樹を倒したとする。斧をふるうのには腕力が必要であるから、彼は手ごろの石をエイヤエイヤ差しあげて腕力をきたえていると、別の男がやってきてもっと大きな石を差しあげてみせる。こちらはナニヲ！というので、更に大きな石を持ちあげる。幾人もの男がやってきて、樹なんか倒すのはそっちのけにして、日がな一日大石を競争で持ちあげている。

しまいに一人の男が、小山のような大石を目よりも高く差しあげると、あいにく足元の土が柔かく、そのままズブズブと地面の中にもぐりこんでしまい、その上に大石がのっかって、あわれや彼はゴリンジュウである。するとみんなはその石に「アッパレ・ゴーケツの墓」などと彫りつけて、手を叩いて彼の怪力をほめたたえる。その女房が泣こうが騒ごうが知ったことではない。

どうも妖しげな情熱にひかれて、なにやかやとしでかすのが男の仕事であり、存外生存の法則にのっとっていないことが多い。

はるか山の上をまわらねばならぬ迂遠な道があるとすると、そのうち一人の男の目が光りだし、

ハタと膝を打ち、家にとってかえすと、槌やらノミやらを持ちだして、固い岩にトンネルなどウガちだす。ゴハンの時間がきても帰ろうとしない。眠る時間となっても戻りはせぬ。やがて髭ボウボウとなり、頬はこけ、マナコはくぼみ、それでもトンカチトンカチやっている。ついに女房は子を連れて家出をし、軒はかたむき、そこにペンペン草が生えても、そんなことは意に介さない。もう、村人の便利のためにトンネルを掘るという目的すらもアイマイとなって、岩をトンカチトンカチやること自体が執念となっている。かくて十何年もたち、むこうの岩がくずれると眩い日の光がさしこみ、ミイラのごとき男はウウムと満足げにうなってそのまま大往生である。

すると、その男のことをキチガイ、コジキ、モグラモチなどと嘲っていた村人たちは集ってきて、偉人、恩人、先覚者などとほめたたえ、モグラモチトンネルなどと名づけて語り草とする。この場合、一家離散し、妻子がひどい目に会っているほど賞讃の声も大きい。

あまり大仰な例ではまずいので、たとえばここに一人の作家がおり、女房が美容院からもどってきてちょっと髪など見てもらいたがっていてもふりむこうとせず、「あなた、お茶」といえば喉の奥で「ウー」とか答え、「あなた、うちの子が落第しました」といえば「俺に似たんだ」と一声つぶやき、ひどいのになると「消えてなくなれ！」などとわめき、さて一人になると髪の毛をかきむしり、一体何をクギンしているのかと思うと、ある文章の末尾を「だった」にしようか「であった」でおさめようかと悩んでいるのである。

そうして出来あがったのをみると、これはやはり名作で、本当はそうでないことが多いのだが、

話の都合上やはり名作で、末代までも残るのであるが、一体この名作がこの世にどれだけの益をおよぼすかというと、これはかなり疑問である。かりに広い意味で益をおよぼしたとしても、作者が髪の毛をかきむしってクギンした微妙な箇所は、音楽が本当は音感もたしかで楽器くらいいじくった人でないとわからないと同様、一般の人には効果をおよぼしはしない。

女房の髪くらい見てやって、準名作をかいたほうが世のためとも考えられる。準名作と名作を区別できる人たちは、むろん名作があったほうが人生が豊かになると考えがちだが、そういう連中は名作によってユウウツになるか、なかには自分も髪の毛をかきむしり、「だった」にしようか「であった」にしようかなどとクギンするようになるので、人類にとってはマイナスのほうが多いかも知れぬ。

ごくごく大ザッパではあるが、男の仕事とはまあざっとかくのごときものである。

ところが女となると、これははるかに生物的条件、あるいは生存の法則にのっとった仕事をやる。ちかごろは次第にそうでない女性がふえだしたが、これは社会的原因によるもので、女性自身の変化によるものではなかろう。

ミツバチとかアリの社会は、この男女の仕事ぶりがなかなか象徴的ともいえる。女王はむろん卵を産むという根本的な大役をもっている。あちこちかけまわって蜜を集めたり、巣をこしらえたり、子供の世話をしたりするのは働き蜂であるが、これは雌の退化したもので、産卵能力こそ

ないがやはり女なのである。一方、雄はまことにグウタラで能なしで、それこそ何にもやらないといってよい。日の光を楽しんだりブラブラ遊んだりしていて、人間の男からみるとケッコウな身分ともいえるが、やがて巣からおっぽりだされて餓死してしまう。身からでたサビとはいえ哀れむべき末路である。

人間の女においても、彼女らの働きは人類の存続に関するかぎり男よりはるかに大きいといってよい。女はかいがいしく料理をつくる。赤ん坊には乳をのませる。おまけに男から眺めると、その形態は優美で、その発声はタエなるもので、その心情はやさしい。本当はそうでないことも多いのだが、話の都合上そういうことにしておく。

女の働きは、かくのごとく天然自然で、男の仕事のように「自然」にさからったキッ怪なことは少ない。それにしても女の場合にも度がすぎれば、やはり仕事といってよい性格をおびてくる。たとえば女の足はすらりとして、毛ズネなどなく、女の髪はなよなよとして、えもいわれぬフゼイがあり、これによって男を惹きつけ、ついには愛の巣などを営むようになって、まことにメデタイのであるが、これをいっそう効果的にしようとしすぎるのが女の仕事である。足をいやがうえにもすらりと見せようとするために、いやがうえにも高いハイヒールをはくが、これはテングの一本歯の高歯よりも不健康なハキモノで、流産の原因にもなる。せっかくの髪は電気やらヤケヒバシやらで焦がしたり渦をまかせたりする。これはもう天然自然の対男性の手段ではなく、対同性の対抗意識でもなく、度をこしたあやしげな執念としか思われぬ。

ゴハンをつくるにしてもそのとおりである。女は料理学なるものを習い、テレビやら本やらで地球上に行われるさまざまな調理法を知っていて、そのため人類は栄えてゆくのだが、これがもうちょっと熱心になると、仕事とよばるべきものになってくる。男が牛乳びんからラッパのみしようとすると、女はピシャリとその手を叩き、ちゃんとコップにそそいで出してくれる。これはそのほうが見た目もいいし、消化にもいいから男はぜひともこれに従わねばならぬ。

ところがなかにはピラミッドのごとき労作ともいえる料理があって、これはいつになったらできるのか見当もつかぬ。もう食べられるのかと思っていると、これがまだ中途で、あまつさえ適応した皿に黄金分割かなにかの法則にのっとって並べ、さらに色彩を考慮して並べなおす。リンゴなんぞ丸ごと齧れば一番うまいのであるが、これも妙な具合にむき、皮の一部を残してピンとはねあげ、ウサギに似ているでしょ、などという。半世紀も待たした末、女はにこやかに笑い、さあどうぞ、というが、そのころは男は餓死寸前で息もタエダエとなっている。

本当は女の本質としてはもっと心情的なものに触れねばなるまいが、そうなると大論文でないと意をつくせぬので省略するとして、女の仕事というものはまあざっとこんなものである。

かくのごとく男女の仕事はかなり本質的に異るものであるが、どちらも仕事とよばるべきものとなると、おもおもしく、いかめしく、讃うべきことではあるが、世を、人類を益するよりも害をながすことが多い。男女ともにあまりにキンベンで熱心すぎるように私には思われる。双方で

キンベンであるから、その仕事の本質の差により、男女の間はさらにひろがり、男には女がわからず、女には男がなおいっそうわからなくなる。両方がそれほどキンベンでなく、もう少しグウタラになれば、男女間の誤解、葛藤、グチやウラミゴトはよほど少なくなるのではないか。

私は仕事なるものに敬意をはらうのにやぶさかではないが、人間はあまりに仕事をしすぎる。大体目を血走らせ、息せききって仕事をするのがアヤマリなのである。ある心理学者は人生をマラソン・レースにたとえた。誰も彼もが夢中になって走っているので、これはタイヘンというわけで自分も走りだす。レースの目的なんぞ知っている者は少なく、みんなが走るから自分も走る。途中で立止ったりすると、落伍者、ナマケモノということになり、敗残のスタンプを押される。

しかし、途中でノソノソしたり、雲を眺めたり、カタツムリを摑まえて「ツノだせヤリだせ」などと呟いたりするのが案外人間にはふさわしいのかも知れぬ。ナマケモノという語感には、プベツと裏返された栄光がつきまとっている。少なくともナマケモノというものへ私たちはある種の親近感を抱く。これはナマケモノが多分に人間的だからである。遊ぶこと、なまけることが、人間の最高の存在形式であるからである。むかしの人が夢想した楽園、天国においては、あくせくと働いている者なんぞいやしない。遊びと仕事が溶けあっているのだ。

しかし現実に於ては、富んでいる者も貧しい者もあり、王様もいればドレイもおり、種子をばらまけば山なす収穫の土地もあり、畠をたがやすよりも砲弾のカケラをひろわねばならぬところもある。遊べとかナマケロなどというのはどうも不キンシンであるが、これを不キンシンと考え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com